

前回、1905年の政教分離法に言及したところで、ライシテの歴史を振り返るのをいったん終えた。その後の歴史は現代の問題と絡めて触れていくが、その前に医療とライシテの関係の概要も見ておきたいと思う。

宗教の教えを語る上で重要な点に救済がある。ここでは魂の救済ではなく、病気の治療またそれに続く肉体的な死という点に注目したい。言うまでもなく、病や死は宗教とかかわりが深く、その歴史も長い。社会の脱宗教化を図る段階で、医療と宗教の関係が問題になってくるのはごく自然な成り行きであろう。そこで医療とライシテの関係を少し振り返ることで、病だすけを推進力としてきた天理教の布教伝道のフランスにおける展開を考察する一助となることを願いたい。

王政時代のアンシャンレジーム下において、人生最期の儀式は死に際してカトリックの司祭から受ける終油の秘跡である。そこで最期の改悔を行い、天国へ行くことを願う。しかし天国の前には煉獄があり、その業火によって魂は浄化されなければならないとされていた。この恐ろしい天国への通過点は、残された生ける者たちの仲介（祈りがその代表であろう）によって短縮されるといい、宗教的に死者と生者のつながりを保つ教えとして説かれた。

カトリック教会では長い間、苦痛は魂の救済において重要な役割を果たすと考えられてきた。したがって、痛みを和らげるアヘンがイギリスやオランダでは早くから医療行為の一環として使用されていたのに対し、フランスでは鎮痛はカトリックの信仰実践にはふさわしくないものと考えられた。

フランス革命が起こると、カトリック司祭は戸籍管理の権限をなく奪われてしまい、生死の判断が役人の手に委ねられることになった。しかし役人では生死の判断ができない。そこで医学博士が登場するのである。

1803年から医療に関する法律が制定されはじめるとともに、治療に携わる者は専門的な教育を受け資格を取得することが求められ、従来の経験に基づく呪術的な治療は排除されることになった。こうして19世紀の初めには医療も法律によって管理され、不法医療行為という概念が生まれた。

フランス革命以降、科学や進歩といった言葉が教権主義や伝統と対峙する言葉としてもはやされ、医学の発展もその潮流に乗って大きく進歩した。しかし、19世紀に流行したコレラや結核に対し有効な治療法を提示できなかったこともあり、呪術や祈祷による治療は後を絶たず、19世紀の前半は、カトリック教会が危機感を抱くほどの力を医学界は持ち得なかった。胎児の死後受洗目的以外の帝王切開や、母体保護のためであっても妊娠中絶は教会により禁じられていた。19世紀中葉までは「白頭巾の黄金時代 (âge d'or des cornettes)」と呼ばれるほど白布を頭に巻いたシスターら女性が医療現場で大活躍した。

そんな中1858年、フランス全国医師会 (Association générale des médecins de France) が発足し、宗教家による医療行為を非難し、非科学的な治療に対して法的措置をもって対抗できるシステムがつくられた。科学的な思考が宗教的な制限から解放され、科学こそが宗教にとって代わって未来を保証する

ものだと考える人も増えてきた。

こうして医師はゆりかごから墓場まで命の面倒を見る権威とみなされるようになり、人々の関心は天国における魂の救済よりも命をいかに長らえさせるかに移り変わった。死は天国への通過点から生命体の消滅と考えられるようになって人々のあの世に対する認識も変わり、神が公正な人を救い悪人を懲らしめるのに司祭の仲立ちは必要ないと考えるようになった。

医師たちは医療行為だけでなく、政府と一体となって保健衛生上の役割も果たすようになる。アルコール依存症が労働者の生活を脅かし、梅毒や売春行為の増加が社会不安を増大させると、それらの問題を解決すべく医学的見地から社会的にも政治的にも存在感を發揮した。

同様に医学が発展した国であっても、プロテスタント国とカトリック国ではいくつかの違いがあった。鎮痛剤としてのアヘンの使用については先述したが、その後1847年イギリスでクロロホルムを使った麻酔が発明される。初めて臨床使用したシンプソン医師はその効用を聖書に関連付けることを怠らなかつた。彼は、神がイブを生みだすときにアダムを眠らせたと解釈し、麻酔もそれに値すると説明した。しかし「苦しんで子を産む」という表現が聖書にあるという反論が出ると、ヘブライ語では痛みの語は努力とも訳されるとし、出産は努力のたまものだと反駁した。こうした論争はヴィクトリア女王が麻酔を用いて無痛分娩を行ったことで収束していく。ところがフランスでは麻酔の使用に関する宗教倫理上の世論の一致は見られなかつた。外科手術で行われる麻酔に関しても、死が迫ると終油の秘跡を受けるにあたり意識がもうろうとしまいようにと使用は控えられた。プロテスタントの国々には最期の秘跡も煉獄信仰も存在しない。

もちろん科学者すべてが反カトリックだったわけではない。聴診器を発明したラエネック医師は信仰の配慮から、女性の胸部に自身の耳が触れないようにこの器具を発明したとも言われる。またルイ・パスツールは、二つのフランスの仲介者を自認し、当時信仰と科学の共存を考えることを拒否した科学者が多かつたにもかかわらずその両立を目指し、人類の発展への功績とその信仰心から、学校教育の非宗教化以前には俗の聖人であるかのように、カトリック教会からも高い評価を得ていた。

こうしてみると、19世紀のフランスの医師たちは科学の力によって市民生活におけるカトリック教会の影響力排除に大きく貢献するのだが、結果的に神父の代わりになることはできなかった。生活を保障するため収入の確保にやっきになる医師たちは道徳を教えるにはふさわしくないと見られたふしもあり、死にゆく患者を前に神父を呼ばざるを得ないケースも少なからずあったという。

やはり教育現場同様、医療の現場においても伝統的なカトリック信仰が一息で消えることはなかつた。とはいえ、その非宗教化はゆっくりと着実に進んでいたのである。

[参考文献]

Jean Baubérot, *Diasporiques*, n° 31, octobre 2015.

Séverine Mathieu, « Quelle laïcisation de la médecine française au XIXe siècle ? Éléments de comparaison avec la Grande-Bretagne », *Politiques de la laïcité au XXe siècle*, PUF, 2007, pp. 353-371.